できるだろうか？もし彼らの感性に疑問を感じても、彼らを責めてはならない。増してや性急に再教育しようなどと考えてはならない。幼児期に摂取できなかった栄養素を大人になってから大量に与えても何の効果も表れないのと同じなのである。環境が異なる国々においては、われわれの感性と異なる価値観が支配的であるように、制限環境下で育った彼らは、われわれには理解できない彼らなりの世界観自然観を構築してゆくはずである。もはや、それに期待する以外に術はない。それでも未来の子どもたちの感性を憂慮するのであれば、われわれが自ら破壊し汚染した、われわれの感性のアイデンティティを育んでくれた自然環境を、そして未来の子どもたちもそこで学ぶはずであった多様性のゆりかごを、早急に元の姿に戻す以外に方法は存在しない。

「被差別部落」という多様性と向き合う

内　田　龍　史（現代社会学科教授）

マイノリティへの偏見・差別

私の研究の主たる関心は、「差別やそれらに関する社会問題を解決していくためにはどうしたらよいか」である。そのために、差別と共生の社会学、とくに、マイノリティをめぐる問題を主たる研究テーマとしてきた。マイノリティとは、ある社会のなかでの少数派のことである。例えば、障がい者・在日外国人・LGBT・被差別部落出身者・アイヌ民族など、日本社会にもさまざまなマイノリティが存在している。

残念ながら、マイノリティの人たちは、偏見や差別の対象となったり、経済的に厳しい状況に置かれたり、その結果、自分に自信を持てなくなるといった状況に置かれることが多い。その一方で、多数派であるマジョリティの立場でのほほんと暮らしていると、マイノリティの現状を知る機会そのものに出会うことが少ない。そうしたマジョリティによる知識の欠如、無関心によって、マイノリティが直面している厳しい現状が放置されたり、忘れられたりすることすらままある。

しかし、マイノリティの人びとは、偏見・差別・忘却・無関心に苦しんでいただけではない。それらに立ち向かい、闘ってきたことによって、本特集のテーマである「多様性」が尊重される社会、すなわち、さまざまな違いを持った人びとが、お互いの違いを尊重しながらより豊かな社会を作っていこうという「共生社会」への展望がひらかれてきたことも事実である。

そうしたマイノリティの人びとの生きざまに出会い、マイノリティの視点から現代社会をとらえなおしてみれば、人間・文化の恐ろしさとともに、その豊かさも実感することができる。そして、自分は社会に対していったい何ができるのか、自分を見つめなおすことにもつながるだろう。そう信じて、この間、私は教育活動を実践してきたが、その信念の背景には、学生のときに各地で出会った被差別部落の人びとの存在がある。

被差別部落との出会い

私が主に取り組んできたのは、現代の被差別部落問題（以下、部落問題）である。なぜなら、

「日本社会」において差別の対象となってきた典型的なマイノリティである被差別部落出身者と、マジョリティ「日本人」との関係を把握し、互いに排他的でない対等な関係を形成する条件を析出することは、「日本社会」における共生社会の実現に向けて、実践的な意味を持つと考えるからである。

部落問題の現状を明らかにするための研究を続けてすでに20数年が経過したわけだが、被差別部落に生まれ育ったわけでもなく、校区に被差別部落が存在していたわけでもなく、正直なところ、大学生になるまで部落問題を過去の歴史上の出来事として、縁遠いものとしてしかとらえられていなかった私が、部落問題と直接向き合うこととなったきっかけは、母校である大阪市立大学の講義だった。

入学後に知ったことであるが、私の母校は日本ではじめて同和（部落）問題の講座を開設した大学であり、人権問題に関する講義が充実していた。そのなかに「都市社会と差別」という講義があり、差別問題に興味があった私は早速受講することにした。内容は部落差別を中心とするものだったが、そこで私は、部落差別が今もあるということに衝撃を受けた。何のことはない、自分の視野に入っていないだけだったのである。

そして、講義外でも部落問題について学ぶ機会を先輩や教員の方々が用意してくれた。例えば、母校のすぐ隣には被差別部落があり、先輩たちのフィールドワークの誘いをうけて、環境改善できれいな町になりつつあった部落を歩き、部落解放運動に取り組んでこられた現地の方からお話を伺った。被差別部落は私にとって急に身近なものになり、それらをきっかけとして、先輩や同級生、後には後輩たちと部落問題の現状について学びあい、差別について議論し、各地の部落を訪問・交流して歴史と現状を学んでいった。

そこでのさまざまな学びは、誤解を恐れずに言えば、面白いものだった。知らないことを知る喜び、知ったことでわかる人間社会の恐ろしさと豊かさ。そして、なぜ差別がなくならないのか？大学での学びは、これらの問いに答えを自分で見出すことが求められる「学問」であり、そのうえで自分がどのように生きていくのかを問われるものだった。

そうした学びのなかで私が非常に共感したのは、差別は「される側」の問題ではなく、差別を「する側」の問題であるという部落解放運動のメッセージだった。部落に生まれ育ったことで自らを卑下する必要はない。差別をする側、差別を生み出す社会こそ変えていこう。紙幅の関係で詳細は控えるが、こうしたメッセージは、かつて生まれ育ちを理由として「変」とみなされ、それに恐怖を感じた経験を持つ私を勇気づけてくれた。私は「変」ではなく、「変」と見なす側、社会に問題があったのだと確信を持つことができた。

部落問題をめぐる誤解

ところで、大学入学当初の私は、大きな誤解をしていた。部落差別をなくすことは、「部落」をなくすこと、世の中から「部落」という言葉がなくなり、誰も部落にこだわらなくなることが、部落差別がなくなった社会だとしばらくは考えていたのである。

そうした考えが誤りだと気づいたきっかけは、部落解放運動の中心で活躍されていた、大学の大先輩との出会いだった。その先輩は、講演の機会の場で、「私は純ブラですから」と言った。最初はなんのことだかわからなかったが、「純粋な部落民」の略称だということがわかった。

彼は、大学入学後に部落解放運動に参加する以前、自分の出自に誇りを持つことなどできず、

部落出身である自分のことを否定的にとらえていた。しかし、部落解放運動と出会い、先に紹介したような、差別をする側、差別を生み出す社会こそ変えていこうと力強く立ち上がった先輩たちの想いに触れ、差別と闘ってきた部落民であることにむしろ誇りを持とうという文脈で、「純ブラ」という言葉を使っていたのである。

それまで私が持っていた「部落」という言葉をなくせばいいという考えは、被差別部落という「多様性」の否定、すなわち、差別と闘ってきた人々の生き様や、その人のアイデンティティを奪うことにもつながりかねず、大変失礼な考え方だったと反省した。そのうえで生じた、「部落民」であるという自覚はどこから生まれるのか、誇りはどのように獲得できるのか、部落解放運動は何を目指してきたのか、といった疑問は、その後の私の主たる研究テーマとなる。

接触理論の可能性

ところで、差別はいかに軽減させていくことができるのか。部落問題の解決を目指し、研究を志した私が手がかりとしたのは、「接触理論」だった。「接触理論」とは、アメリカの社会心理学者、ゴードン・オルポートが提唱した理論で、ある条件の下での偏見の対象となる人々との出会い（接触）は、偏見の解消をもたらす効果があるというものである。

この理論を手がかりに、私はかつて、部落問題に関する意識調査をできる限り収集し、部落出身者に対する結婚忌避的態度と、部落出身者とのつきあいの有無との関係が記されている報告書を検討した。そして、すべからく部落出身者とのつきあいがある層の方が、部落出身者に対する結婚忌避的態度をとらない傾向があることを発見した。こうした傾向は、実際にさまざまな意識調査を実施し、データを分析するようになってからも覆されることのない知見である。つまり、問題の解決には問題の当事者との出会いが不可欠だということを検証したのである。

そうした出会いが差別の撤廃に不可欠であることは、私自身が素敵な部落出身当事者との出会いを重ねてきた経験からも言える。ひとりひとり顔の見える存在として当事者と出会ってきた私から言わせれば、部落差別をすることは、まったくもってナンセンスである。

先述したように、主たる研究が現代の部落問題であることもあって、私自身、全国各地で素敵な部落出身者、部落問題に関係する人たちに出会ってきた（もちろん素敵でない人もいるが、そんな人は部落出身者を問わずどこにでもいる）。そこで出会った顔の浮かぶ素敵な人たちが、部落出身であるというカテゴリーに属するからといって、部落差別の対象となることを、許しがたいこととしてとらえられるようになったのである。

加えて差別は、差別者が被差別者との関係を切ることなのだと考えるようになった。絆やネットワークの重要性が強調されている現代社会において、自身の先入観や偏見によって差別をすることは、もしかしたら生涯の友人となる可能性のある人との関係を、あらかじめ切ってしまうことにほかならない。一人では生きることができない人間社会において、差別はなんともったいない状況を生じさせるのだろうと痛感するようになったのである。

出会いをつなぐ場としての大学

こうした経験を持つ私が、指導するゼミで重視しているのは、さまざまな当事者・現場の方々との出会いである。ゼミ合宿では、大阪・神戸の被差別部落を訪問・交流したり、外国人集住地、新潟水俣病、阪神・淡路大震災、中越・中越沖地震などの現場を訪問し、被害・被災体験

を次世代に継承することの意義を、学生たちに考えさせる指導をしてきた。

自分とは生まれも、立場も、経験もまったく違う人からは、学ぶことばかりである。学生たちには、そうした出会いを通じた学びを興味深い、楽しいと思ってもらいたいのだが、少なくとも交流した人びとを差別することはなく、わざわざ現場を案内してくださったり、辛い経験を語ってくださる皆さんに、尊敬の念を抱くようになるという実感はある。

「多様性」の尊重は、違いを実体験することからはじまる。かつての私がそうだったように、大学での学びがそのきっかけとなってくれれば、幸いである。

※本稿は、拙稿「部落問題とであって学んだこと」福岡県福祉労働部人権・同和対策局調整課『私たちはなぜ、人権について学ぶのか』（23-26頁、2016年）ならびに拙編著『部落問題と向きあう若者たち』（解放出版社、2014年）を大幅に改訂したものである。

多様性というチャンス、そして修正能力

久　慈　るみ子（環境構想学科教授）

今回の特集テーマである「多様性」は考えれば考えるほどむずかしい。本質に迫ることなど絶対にできないと確信し、ここでは身近なところでの多様性がもたらす課題と自分がどう向き合うか考えたことを述べさせていただきたいと思う。

人は同質の人々といると自分を肯定された感覚が生じやすく、居心地が良い状態になりがちである。異質つまり多様な人々といると、自分の考えや経験と異なる事象にぶつかり、時に否定されたように感じることも多くなる。つまり多様性はストレスを伴うことになる。多様性と向き合うことはストレスと向き合うことかもしれない。このストレスをマイナスと感じる人は多様性を遠ざけ、極端になると排除しようとする。しかし、プラスの刺激とみる人は、ストレスを受容し、楽しいと考えるかもしれない。

大学における教員のmissionの一つは教育、つまり学生と向き合うことである。多様な個性を持つ学生の存在は教員にとっては一つのストレスである。しかし前述のようにプラスにとらえることによって多様な個性は教員に良い刺激をもたらす可能性を有している。つまりチャンスのはずである。

しかし、多様な個性と向き合う場合に、いくつかの課題ともいえるものが頭をよぎる。まず、きわめて個人的には、多様性を楽しむ時間を過ごしたい。ストレスは傷つかない程度にしたい。そのためにはお互いに受容する力、客観的判断をする力と、否定する力を持つことが必須であるように思う。しかも否定する力は拒否ではなく、差を認め合う表現力をもって、はじめて意味をなすと考えるのである。自分にとっては、かなりの難問である。

次に教員と学生という観点からは、①様々な個性を持つ学生と向き合うにあたって公平性をどう担保するか。特に成績評価は大きな問題である。また、②人は多様なのだから、すべて受け入れなくてはならないのか。③多様な個性の学生を受け入れ、どのような教育で、多様な個性をどのように伸ばそうと考えるか、などなど。自分の中で課題は山積している。